

「梅雨の時期に関する沖縄地方気象情報 第1号」の解説

1 梅雨入りの発表

沖縄地方では、前線の影響で曇っており、雨の降っている所があります。

5月16日発表の週間天気予報では、向こう一週間も、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多くなる見込みです。このため、沖縄地方は5月16日ごろに梅雨入りしたと見られ、沖縄気象台は5月16日11時00分に「梅雨の時期に関する沖縄地方気象情報 第1号」を発表しました。

2 今年の「梅雨入り」は5月16日ごろ（階級：「平年より遅い」）

沖縄地方の今年の梅雨入りは平年より7日遅く、昨年（2018年）に比べて16日早い梅雨入りとなりました。

沖縄地方で過去、最も早い梅雨入りは1980年の4月20日ごろで、最も遅い梅雨入りは1963年の6月4日ごろとなっています（※沖縄地方の統計開始年は1951年です）。

【参考】

梅雨入りの時期の階級区分（沖縄地方）

かなり早い	早い	平年並	遅い	かなり遅い
～5月1日ごろ	5月2日ごろ～ 5月5日ごろ	5月6日ごろ～ 5月9日ごろ <u>平年：5月9日ごろ</u>	5月10日ごろ～ 5月16日ごろ	5月17日ごろ～

注1. 梅雨は季節現象であり、その入り明けには、平均的に5日間程度の「移り変わり」の期間があります。

注2. 「平年」は、2010年（平成22年）までの過去30年の平均の日付です（入り・明けを特定しなかった年は除外）。

3 今年の梅雨の時期の天候と降水量（季節予報）

5月9日発表の1か月予報によれば、5月11日から6月10日までの天候は、「平年と同様に曇りや雨の日が多い」と予想しています。降水量は、「平年並」又は「平年より多い」確率がともに40%、「平年より少ない」確率が20%、日照時間は、「平年並」の確率が40%、「平年より多い」又は「平年より少ない」確率がともに30%です。

また、4月24日発表の3か月予報によれば、5月と6月の降水量は、「平年並」又は「平年より多い」確率がともに40%、「平年より少ない」確率が20%となっています。

沖縄地方の「梅雨の時期における各地の降水量の平年値と極値」は次表のとおりです。

梅雨の時期における各地の降水量の平年値と極値（単位：ミリ）

地点名	5月の降水量の平年値	6月の降水量の平年値	梅雨の時期(5～6月)の降水量		
			平年値	最大値(年)	最小値(年)
那覇	231.6	247.2	478.8	1129.0(1969年)	56.0(1991年)
名護	222.4	244.1	466.5	1445.5(1969年)	84.0(1991年)
久米島	265.0	263.9	528.9	1113.5(1969年)	192.5(1991年)
南大東島	200.6	186.1	386.7	1191.0(1969年)	91.0(1991年)
宮古島	207.7	185.5	393.1	910.3(1966年)	29.5(1971年)
石垣島	206.6	206.6	413.3	948.3(1965年)	66.5(1971年)
西表島	182.1	197.8	379.8	795.0(1998年)	72.5(1971年)
与那国島	207.4	164.0	371.4	897.4(1957年)	85.0(2002年)

注1. 梅雨の時期の降水量の統計開始年は、那覇・南大東島・宮古島・石垣島は1951年、名護は1967年、久米島は1959年、西表島は1961年、与那国島は1957年となっています。

注2. 梅雨の時期の降水量の平年値は、5月1日～6月30日までの日降水量合計値の30年平均値(1981～2010年)であり、5月と6月の月降水量平年値の合計値ではありません。

4 梅雨明け

「梅雨明け」は、梅雨前線が沖縄地方から遠ざかって、太平洋高気圧に覆われるようになり、曇りや雨の日が減って、晴れて日照時間が多くなる時期を総合的に判断して決定します。

沖縄地方における梅雨明けの平年は6月23日ごろです。昨年(2018年)の梅雨明けは6月23日ごろでした。

沖縄地方で過去、最も早い梅雨明けは2015年の6月8日ごろで、最も遅い梅雨明けは1976年の7月9日ごろとなっています。

【参考】

梅雨明けの時期の階級区分(沖縄地方)

かなり早い	早い	平年並	遅い	かなり遅い
～6月17日ごろ	6月18日ごろ～ 6月20日ごろ	6月21日ごろ～ 6月23日ごろ 平年：6月23日ごろ	6月24日ごろ～ 6月29日ごろ	6月30日ごろ～

注. 「平年」は、2010年(平成22年)までの過去30年の平均の日付です(入り・明けを特定しなかった年は除外)。

5 梅雨前線の特徴

本州付近の梅雨前線は、オホーツク海高気圧がもたらす北東からの冷たく湿った空気と太平洋高気圧がもたらす南からの暖かく湿った空気の境目付近に発生します。

沖縄付近の梅雨前線は、本州付近の梅雨前線とは異なり、乾いた空気からなる移動性高気圧と暖かく湿った空気からなる太平洋高気圧の境目付近に発生します。梅雨前線の動向は、太平洋高気圧の勢力が平年に比べて強い弱いにより左右され、太平洋高気圧の勢力が強い場合は沖縄地方の北側に、弱い場合は南側に位置します。沖縄では梅雨の時期が、二十四節気の「小満」と「芒種」の時期にあたることから、「スーマン(小満)ボース(芒種)」とも呼ばれています。

6 梅雨の時期の大雨災害

梅雨前線に暖かく湿った空気が大量に流入すると、梅雨前線の対流活動が活発となって大雨が降りやすくなります。大雨の降りやすい条件として、①梅雨前線に向かって太平洋高気圧から暖かく湿った空気が大量に流入する場合、②梅雨前線に台風が接近する場合、③前線上に低気圧が発生する場合などが考えられます。

梅雨の時期には大雨による災害の発生が多く見られます。2006年(平成18年)の5月下旬から6月中旬にかけては、梅雨前線が沖縄本島近海で停滞することが多かったことから、中城村や那覇市では大雨と長雨の影響も重なって大規模な土砂災害が発生しました。